

京都哲学研究所 ホワイトペーパー

エグゼクティブサマリー（抜粋版）

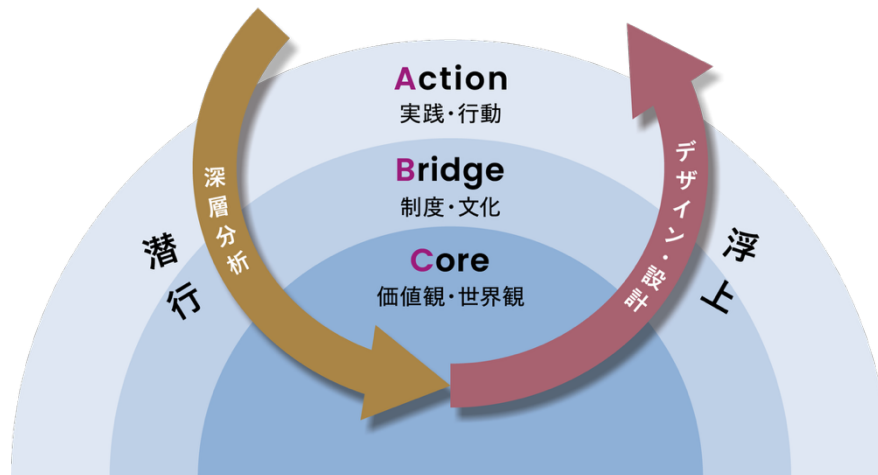
地政学的緊張の高まり、気候変動の加速、人工知能の急速な発展——現代社会は、相互に関連する複合的な課題に直面している。従来のアプローチでは、これらの課題への対処が難しい根本的な理由は、20 世紀を通じて社会発展の指針となってきた「経済成長と科学技術の発展を中心とする進歩」という大きな物語が、その有効性を失って久しいことにある。共通の目的と方向性の喪失は、組織や社会のあらゆるレベルにおいて、意思決定の基盤そのものを揺るがし続けている。そのような中で、我々はポスト SDGs 時代を見据えた、新たなグローバルアジェンダの構想という、時代的な要請に直面しているのである。

この状況は、ビジネス、政策、学術、そして芸術や教育、市民活動といったあらゆる領域において、より根本的な問いへの回帰を不可避なものとしている。現代社会の基盤となっている「効率性」や「合理性」の追求は、目的を達成するための「How (いかにして)」は教えるが、そもそも「Why (なぜ)」その目的を目指すのか、という本質的な問いに答えを与えるものではない。だからこそ、今問われるべきなのは「我々は何を価値あるものと見なし、いかなる社会を目指すべきか」という、価値 (value) をめぐる問いなのである。本稿は、この根源的な問いに向き合うためのアプローチを提示することを目的とする。

そのアプローチの第一歩として、本稿はまず、現代の課題を根本から理解するための視点を提示する。第一に、課題を生み出すメカニズムを「分断 (Fragmentation)」——異なる価値観の対立——と「変容 (Transformation)」——新たな技術や社会変化による価値観の再編——という二つの力学 (プロセス) として捉える。

第二に、この複雑な力学を分析し、乗り越えるための思考法として「ABC モデル」を提案する。このモデルは、社会現象を、①可視的な「実践」(A: Action レベル)、②その根底にある「価値観・世界観」(C: Core レベル)、そして③両者をつなぐ「媒介」(B: Bridge レベル) の三つのレベルで構造的に把握する。そして、この構造を用いて問題の根本原因へと思考を深く掘り下げ (潜行)、新たな価値観から未来を描き出す (浮上) という、ダイナミックな思考のプロセスを促す。



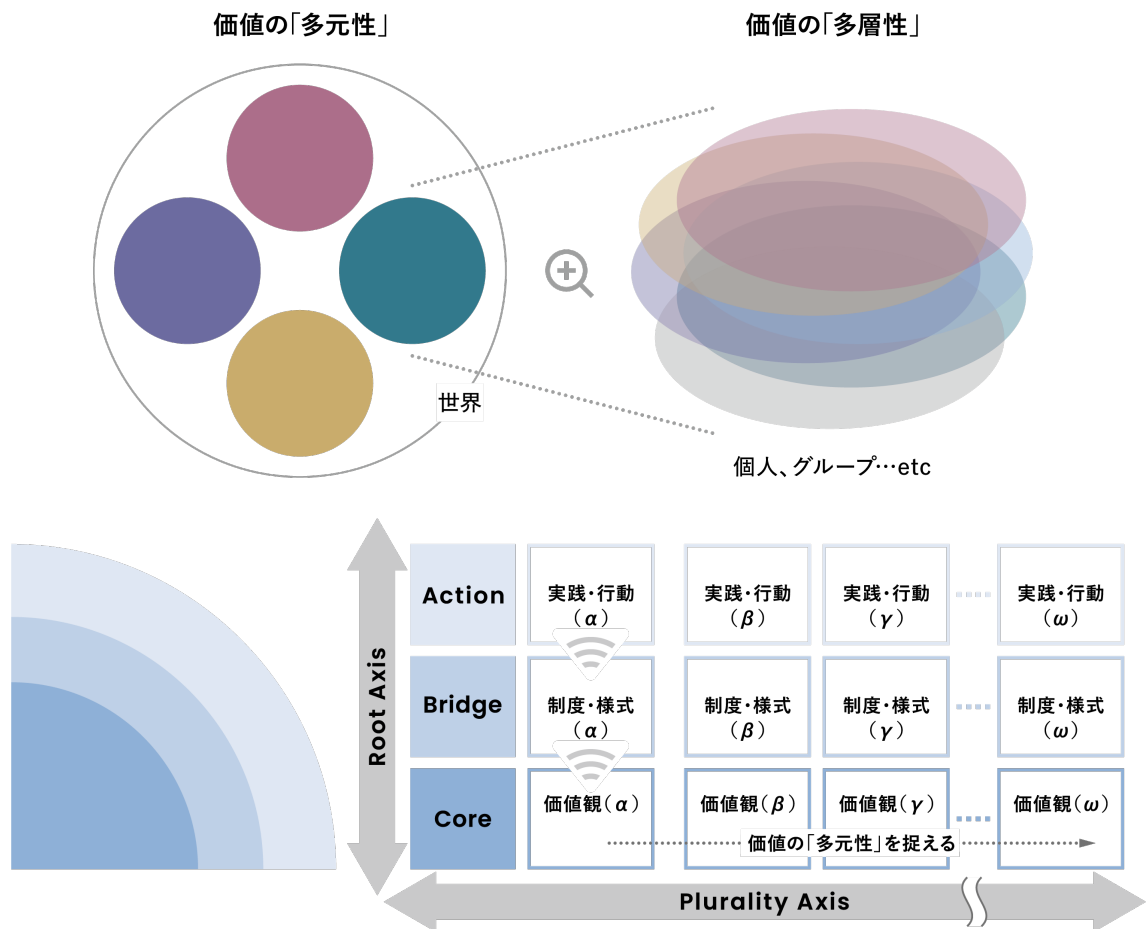


このフレームワークを真に機能させる『潜行と浮上』の往還運動は、哲学を始めとする人文学の知的技術なしには成立しない。価値の探求に不可欠なその技術は、特に哲学において、以下の四つの知的な営みとして整理されてきた：(1)暗黙の前提を可視化すること、(2)概念を厳密に定義すること、(3)多様な価値観の対話を促すこと、そして(4)新たな価値を構想すること。これらは、単なる分析に留まらず、新たな社会を構想し、実践へと繋げるための知的な活動そのものである。

以上の分析と方法論は、社会変革を目指す実践者に向けた、以下の 4 つの行動指針（アジェンダ）へと結びつく：

1. **価値の焦点化：**課題の根底にある価値を探求の対象とする
2. **根源的問いと実践の結合：**価値の探求を社会のあらゆる領域における実践と結びつける
3. **人文学の知の活用：**価値に関する専門的知見を実践的文脈で積極的に活用する
4. **価値共創ネットワークの構築：**セクターや地域を越えた協働的な価値探求の場（プラットフォーム）を形成する

これらのアジェンダが指し示すのは、「**価値多層社会 (Multilayered Society of Values)**」という新たな社会ビジョンである。これは、価値の多元性と多層性（個人や社会が、その内側に矛盾しうる複数の価値を抱える構造）を社会的豊かさの源泉として積極的に位置づけ、継続的な対話と創造的な緊張関係を通じて、より包摂的で革新的な社会を実現しようとする未来像に他ならない。



本稿は、このビジョンの実現に向けた、学术界、産業界、政策立案者、芸術家、教育者、宗教家、そして行動する市民社会の協働による探求への貢献を意図している。

2025 年 8 月 29 日 版

監修 出口康夫、Markus Gabriel
統括執筆者 五十嵐涼介
研究チーム 高木俊一、辻麻衣子、Samuel Mortimer